

ドイツ青年運動におけるエロスと教育

——グスタフ・ヴィネケンをめぐる——

奥田敏広

第一章 「自由学校共同体」 ヴイツカースドルフ

ヴァンダーフォーゲルに始まる今世紀前半のドイツ青年運動が一つの頂点に達した、一九一三年一〇月一日から一三日にかけてのホーエ・マイスナーにおける「自由ドイツ青年」の結成集会で、もつとも精力的に発言した中心人物のひとり、青年と言うにはすでにいささか年を取っていた当時三八歳のグスタフ・ヴィネケンであった。しかし、たとえば同じくもはや青年とは言えないルートヴィヒ・クラークス（その時『人間と大地』と題した講演を行っている）¹の場合、何といっても青年運動にとっては客人というべき存在であったのに対して、「自由学校共同体」における実践教育や講演活動を基盤に「青年文化」を提唱していたヴィネケンは、自他ともに認める青年運動の代表者、もう少し詳しく言うなら、どちらかというところ復古的な民族主義が主流を占める中でそれらに対抗していた進歩的な勢力の代表者であった。この大会においてもヴィネケンは、「祖国と、われわれが身についている自明な祖国愛から、あえていったん自分を引きはなすことをしなければならない」と述べ、「安っぽい

きまり文句」としての「祖国愛」に警鐘を鳴らすとともに、「他民族の谷あいの地で、戦闘を強いられる日が決してこないことを」と断固として反戦の決意を表明している。⁽²⁾この章ではまず、そういうドイツ青年運動の進歩的代表者ヴィネケンの前半生を概観しながら、今日必ずしも十分認識されてはいない彼のラディカルな体制批判の一端を浮き彫りにしたい。

一八七五年エルベ川河口の町シュターデにおいて牧師の息子として生まれたヴィネケンは、ベルリンやゲッティンゲンの大学で神学や哲学を学び、九八年『ヘーゲルのカント批判』で学位を取る。このように彼は既成の教育学を勉強したことはなく、大学を出るまでの彼の興味は哲学に向けられていた。しかし、その後一九〇〇年から彼は、ヘルマン・リーツが当時ハルツのイルゼンブルクで始めていた「ラントエアツィーウングスハイム（田園教育施設）」に、最初は一教師として、四年後からは校長として参加することになる。この「田園教育施設」においても、しかし依然として「生徒が公共の学校や家庭においてそうであったところのもの、すなわち素材であり続けた」ため、ヴィネケンは一九〇六年、パウル・ゲヘープとともに「青年独自の価値と彼ら自身の人生への権利」を最大限に尊重すべく「自由学校共同体」をチューリンゲン山中のヴィッカーズドルフに創設する。

ヴィネケンは、少し前に始まり「大人の都市文化に対する、そして奢侈や偽りと結びついた芸術享楽に対する反抗、さらなる簡素さと内面性への欲求を根本とする」ヴァンダーフォーゲルとその理論家としてのブリュアーの功績を、「青年を発見」したと高く評価してはいたが、しかし、それが学校という青年にとって根本的な問題を「無視するだけで拒絶」⁽³⁾している点に不満を感じていた。

青年文化は、それが青年の学校生活にまで及ばない限りは、中途半端で見せかけのものに留まる。ここにヴァンダーフォールに代表される青年運動に対する第二の運動が、すなわち自由学校共同体の運動が成長したのである。¹⁰⁾

この「自由学校共同体」は、技術や実利的な知識の追求に汲々とするのではなく、きわめて理想主義的な教育を提唱していた。

自由学校共同体は、一般の学校のように単に技術や科学を志向しているだけではなく、精神を志向しているのであり、目に見える成果だけではなく、そういう成果を超えた絶対的な価値、真実と美の法則における精神の自立性を意図している。¹¹⁾

しかし、こういういささかありきたりの抽象的な理想を掲げていただけではなく、ヴィネケンは市民社会の学校に対する仮借ない批判者でもあり、それは、その実利的な教育のみならず、当時確立しつつあった市民社会の学校制度そのもの、その管理と抑圧、そして支配のメカニズムに向けられていた。

来るべき種族は我々の教育システムをさでどう評価するだろうか、若い沸き立つ身体を毎日八時間も勉強机の前の椅子に縛り付けて、その若い頭脳を薄っぺらで彼らにはたいていどうでもよい博識にかかずらわせ、

この有機体の本来の肉体的および心理的現実については何も知らないと称している教育システムを？ 少なくとも以前は、学校教育に抵抗する青春時代の生の意志の強烈さが認識されており、その意志を打ち破るには苛酷な罰しかないと思われていた。「中略」それが今や、肉体的残忍さがなくなった後でも昔ながらの授業が、若者には興味のない教材や反自然的な方法によって維持できるという虚構で自己欺瞞を行っている。我々は、ほとんどすべての領域においてそうであるが、まさにここでもまた、市民的リベラリズムの中途半端を体験する。拷問の廃絶によっても依然として事情は変わらず、まったく新しい訴訟手続きが発見されねばならなかったように、学校における肉体的恐怖の廃絶が成し遂げたことといえ、より厭わしい精神化された恐怖を導入せねばならないということだけだった、すなわち進級や成績評価や試験に対する心配であり、それらを今日学校はその支配権のよりどころとしている。¹²

ヴィネケンによれば、既存の学校とは若者を不当に抑圧し支配する制度にほかならず、「学校は一種の監獄」¹³ということになる。したがってまた、そこでの抑圧と支配に苦しむ青年を「解放」する青年運動とは、「階級闘争」や「女性運動」と並ぶ「解放闘争」に他ならない。¹⁴ヴィネケンは市民社会の学校制度に対する、その「市民的リベラリズム」の「虚構」と「自己欺瞞」に対するきわめてラディカルな批判者であった。

それにしても、このような仮借ない市民社会の批判者に対して、時の当局がさまざまな干渉や迫害を行ったのもまた当然のことであった。「自由学校共同体」ヴィッカーズドルフ創立四年後の一九一〇年に、早くもヴィネケンはそこを追われている。

私がへつらおうとはしなかった官僚たちによって、小冊子『自由学校共同体に対する内閣』において描いたような不正で不当なやり口を用いて、一九一〇年に私は私の創設したヴィッカーズドルフから追放された、同僚たちとヴィッカーズドルフの若者たち、施設の事務局、および父兄の大部分の一致した反対、いやその上マイニンゲン州議会の票決にさえ反してである。それから私は故郷を持たず何年間も世界を旅してまわり、再三新しい創設の試みをしたが、その度にまたいつもとりわけあの執念深い官僚たちの抵抗に出くわすのであった。⁽¹⁵⁾

このように当時の文部官僚から目の敵にされていたヴィネケンとは、第一次大戦前のドイツ青年運動において最も左翼的な立場を代表する人物であり、彼が責任編集者となり大学生やギムナジウム学生が寄稿していた雑誌『アンファンク（始まり）』は進歩的な青年運動の拠点となっていく。

これらのいわゆるヴィネケン派には、後に史的唯物論とユダヤ神秘主義思想に依拠しつつ「複製技術時代」の現代芸術に対して卓越した批評を展開することになるあのヴァルター・ベンヤミンや、すでに一九一〇年代に非合法のドイツ共産党に入る筋金入りの共産党員で、その後もコミンテルンの闘士としてヨーロッパ中を股にかけて活動することになるアルフレート・クレラなどの若者も属していた。すなわち、ベンヤミンは、一九〇二年から一九〇六年までリーツの創設した第二の「田園教育舎」ハウビンダ校に属し、そこで「多くの教師たるヴィネケン博士」に「決定的な影響」を受け、その後のフライブルクやベルリンでの大学時代には「ヴィネケンの厳格で熱狂的な弟子」として「自由学生連合」を足場に学生運動に奔走する。⁽¹⁶⁾一方クレラは、直接ヴィネケンの生

徒だったことはないが、ボンのヴァンダーフォーゲル時代から『アンファンク』に興味を持ち、その後ヴィネケンやその著作を知るに及んで「彼の青年文化という理念および自由学校共同体という教育原理の熱狂的な崇拜者」になり、ヴィネケンのヴィッカーズドルフ復帰を求める運動を繰り広げたのだった。¹⁷

第二章 「共同体」

しかしながら、前章で見たようなヴィネケン派の攻勢も、一九一四年八月に第一次大戦が勃発し、ヴィネケンがその『戦争と青年』において、「君たちの安っぽい理屈に耳をかさず、むしろ君たちの血の声に耳を傾けよ」と「聖なる戦争」を賛美する姿勢を打ち出したことにより、急速に終焉に向かう。¹⁸失望した若者たちはヴィネケンから離れてゆき、中でも翌年三月にベンヤミンが送り付けた絶縁状は有名である。¹⁹ベンヤミンはヴィネケンの転向を「裏切り」と呼び、以後決して彼を許そうとはしなかった。²⁰

なるほど本稿の冒頭で言及した「祖国愛」に対する慎重な対処を要求するホーエ・マイスナーの演説が、わずか一年あまり前のことに過ぎなかったことを考えると、これは一見ヴィネケンの転向のようにも見えるが、しかし、もともとヴィネケンの思想には民族主義を必ずしも否定はしない非合理主義的・ロマン主義的な要素があったのも事実である。²¹ベンヤミンらの血気盛んで革新的な若者たちは、その点を見逃していたのであった。すなわち、ヴィネケンは、前章で見たような学校批判を核とするラディカルな体制批判を展開したが、その一方でしばしば、それが単に否定的、批判的なものでないことを強調している。彼の「学校批判はまったく建設的な志向

を持ったもの」だといふのである。それは決して解体的で無責任な批判に終始するものではなく、「精神的有機体」を打ち立てようとする「建設的」な提言なのである。

この新しい学校は実験ではなく、ひとつの生きた精神的有機体である、改革によつて部分から組み立てられた機械ではなく、芸術作品か生き物のように統一された全体的なものである。⁽²²⁾

たとえばまた、例のヴィネケン派の『アンファング』についても、そこで展開されていることは、「革命的なアナーキズムのまさに対極」であると次のように述べている。

『アンファング』に携わっている者たちには、新しい学校に対する情熱的な憧憬が息づいている、それは革命的なアナーキズムのまさに対極であつて、むしろ新しい法、新しい形式、新しい指導者への意志である。⁽²³⁾

このような「新しい法、新しい形式、新しい指導者」といふような志向は、革新的・前衛的な可能性を含んでいるが、また同時に復古的・反動的な要素を予感させるのも確かであり、この点に関するヴィネケンの考え方を、以下でさらに詳しく考察したい。

ヴィネケンの言う「建設的」なものの第一は、詰め込み教育の知識偏重に対する「身体」の重視であつた。一九世紀以来急速に発達した機械・技術文明の理性偏重の一方でおおざりにされてきた「身体」と「自然」を取り

戻そうとするのがドイツ青年運動の端緒となったヴァンダーフォーゲルの運動であり、前章で言及したようなヴィネケンのヴァンダーフォーゲル評価も、まさにそういう運動としてのヴァンダーフォーゲル理解に基づいている。「身体がともかく再び発見され、人は再び自らを身体と感じた」⁽²⁵⁾のであって、そういう「身体」が「徒歩の旅の中で再び獲得した自然との内的共同」⁽²⁶⁾こそ、ヴァンダーフォーゲルの功績であった。なるほどヴィネケンは「ヴァンダーフォーゲルのロマン主義には多くの人工的で真正ならざるもの、まやかしが隠れている」と考え、「現存する精神世界や公共世界で無力な者」が、「中世と遍歴気質、民族芸術へ逃避」している、と彼らの「逃避」姿勢を鋭く批判してはいた。⁽²⁷⁾しかし、「概念に対する生の闘争であり、肉体の独立闘争である」⁽²⁸⁾その「新しい身体感情」自体は、ヴィネケンの高く評価するものであって、それは、階級闘争や女性運動などの「社会的解放闘争」よりもより根本的に「新しい原理」である。なぜなら、「すべての社会的解放闘争はまだ学問的精神の時代に属している」て、「機械的で量的な進展」に過ぎないのに、「肉体の独立闘争」こそは「何か質的に新しいもの」だからである。⁽²⁹⁾

もともと、この「新しい原理」は、「身体」を強調するあまり、単純な反主知主義や非合理主義と結びつくことではない。ヴィネケンにとって、「強くて健康な動物を育てる」ことや単なる「健康」が目的のではなく、「青年文化」こそ彼の目指すものだからである。⁽³⁰⁾青年運動の一部に見られる禁酒運動らの生活改革運動に彼が組しないのは、それが「健康」を至上の価値と見なしているからである。ヴィネケンは、「精神的な価値以外にいかなる価値も存在しない」し、また「単なる健康から文化を導くことは不可能である」⁽³¹⁾と断言している。「新しい身体感情」が「新しい原理」たる理由は、それが「新しい文化」を生み出し構成する柱となるからこそであった。

そこで、そういう「新しい身体感情」と「新しい文化」を結びつける際にヴィネケンが強調するのが、「有機体」と「共同体」の理念である。人間というひとつの「有機体」の中では、「精神」や「身体」というものが個々ばらばらに、あるいは敵対的に存在しているのではなく、それらは「協同」して働いている、すなわち、「協同精神がつくりだす身体は、ひとつの文化である」というのである。また、「新しい学校」においては、「学校と生徒、教師と生徒との新しい内面的関係と彼らの協同の関係」を打ち立てなければならない。「機械装置」ではない人格的交流に基づく「青年の精神的故郷」としての「共同体」の創造こそ、ヴィネケンが目指すものであった。

しかしながら、このような「共同体」の強調は、そもそも当時の青年運動一般に見られることであるが、一方で民族主義的で反動的な方向に進みかねない危険を孕んでいるのもまた確かである。ヴィネケンの場合も、「共同体」を実現する上で、すでに言及した「身体」の重視と並んで「指導者原理」を提唱するが、たとえばこの「指導者原理」には、彼の教育理念が孕む権威主義的な問題性が端的に表れている。

私が欲していること、すなわち新しい青年文化の理念は大衆には難しすぎる、と言われたことがある。大衆は個々の小さくて分かりやすい目標や課題を望んでいる、と言うのである。〔中略〕しかし、個々の者たち、最良の者たち、真剣な者たち、深遠な者たち、満足した者たち、絶えず前進する者たち、知者たち、創造的な者たちが、大衆に対して新しい生と精神の源泉になる、というのが指導というものである。大衆を直接的に生き生きとさせることはできないのであって、それは彼らの指導者を通して間接的にのみ可能である。大衆が大衆としてできる最高のことは、彼らが再び指導者を要求するようになり、真の指導がどこにある

かという感覚を持つことである。⁽³⁸⁾

「大衆」と「指導者」を区別するこの「指導者原理」の中には、確かに非民主主義的で権威主義的な要素がある。なるほどここにおいて「指導者 (Führer)」はまだ複数形であるが、あのナチズムにおいて独裁者が「総統 (Führer)」と呼ばれていたことを考えると、この「指導者原理」の危険性は大きいと言わねばならない。実際また、この章の冒頭で言及した戦争賛美の影でほとんど知られてはいないが、ナチス第三帝国に対してもヴィネケンは必ずしも反対はしなかったのである。⁽³⁹⁾

このような社会的・思想的姿勢を根拠に、ヴィネケンは一方で反動的な考え方も持った教育者であって、せいぜいいわば(前章で言及したベンヤミンやクレラの)産婆役として今世紀のラディカルな体制批判の端緒となつたに過ぎない、というような評価が今日では一般的である。たとえば今井康雄は、権威主義的教育を批判しているはずのヴィネケンの「社会批判的教育思想」もまた、「反権威主義的かつ権威主義的という両義的な性格をもつ」と総括しており、鈴木聡は、そのような「権威主義的性格」は「労働者階級と決裂」した「ドイツ教養市民層」が伝統的・必然的に持つ「社会思想的限界」であると結論している。⁽⁴¹⁾ キリーのドイツ文学辞典でも、ヴィネケンは「部分的に市民的イデオロギーに非常に鋭い批判を行いはしたが、大袈裟でとりとめのない、口先だけのラディカルさに留まっていた」と総括されている。⁽⁴²⁾

しかし、そうだろうか？

私はヴィネケンの教育論の根幹にあるのは実はエロスの問題であり、そのエロス論においてヴィネケンは、上

述のような既成の評価にもかかわらず、きわめて革新的で現代的な意義を持っていると考えている。なるほど、ヴィネケンを論ずる際「エロス」という言葉自身は頻繁に使われてはいるが、その内実がどのようなものであるかの説明はほとんどないか、せいぜい抽象的なものに留まっているのが現状である。⁽⁴³⁾次の最終章では、ヴィネケンにとってそもそもエロスとは何であり、いかなる意味をもっていたのかを詳しく問題にすることによって、彼の市民社会批判の意味を再検討したい。

第三章 「パイデラスティア（少年愛）」

前章において非人格的で一方的な知識の詰め込みに対するヴィネケンの「新しい身体感情」や「共同体」、「指導者」の提唱を見てきたが、実はそれらは、当時の青年運動や教育改革運動一般にも多かれ少なかれ見られるものである（あるいは現在の教育論まで続いているとさえ言える）。ヴィネケンの思想と活動が真に独創的でラディカルである所以は、そこで提唱されていた人格的交流と「指導者原理」というものの実態が、この章で詳述するようなエロスというきわめて濃密な感情に基づくものであるからに他ならない。そこに見られるのは、単なる師弟関係ではなく、ある種の恋愛なのである。もともと「特別な教育学的興味からではなく」一時的な腰掛けとして「田園教育舎」の仕事を手伝い始めたヴィネケンが、そもそも教育の問題に深入りしていくのも、「田園教育舎で私の周りに集まった若い友人たちといっしょに居続けたいという欲求」によるものなのであり、彼においてはエロスこそ「教育的情熱の源泉」なのである。⁽⁴⁴⁾

なるほど、学生時代のベンヤミンの文章にもあるように、当時「エロスの教育」というモットーが時代の流行になっていたのは確かである。しかし、そこにおけるエロスとは、ベンヤミンも批判しているように、せいぜい「ビザンチン・ローマ風の名前」にエキゾチズムを感じるようなもので、息子が父親の恋愛を見習う、といった「家庭的拘束」の枠内にある市民社会に何ら抵触しないものであった。¹⁵しかし、ヴィネケンがエロスに基づく教育を実践しようとした場合のエロスとは、教師と生徒の間に働く力であり、それはまさに、前者が後者に対して持つとされる権力故に、そしてまたそれが同性愛であるが故に、当時から今日に至るまでの近代市民社会においてタブーとされてきた問題に他ならない。

ところで、ヴィネケンはこの少年（生徒）と青年男性（教師）の間に働くという「まったく特定の典型的関係」としての「エロス」に対して、単に「gleichgeschlechtliche Liebe（同性愛）」とか、ドイツ語化されて元来の意味が薄くなった「Paderastie」という表現で一般化するのを頑なに拒否し、あくまで「Paderastia（少年愛）」というギリシャ語を使うとする。¹⁶それは、古代ギリシャにおいてこの「パイデラスティア」という愛の形が持っていたイニシエーションとしての役割をヴィネケンが重視するからに他ならない。すなわち、この「パイデラスティア」というエロスにおいては、快楽や種の保存ではなく、「人類に対するエロスの最大の功績は教育である」¹⁷というエロスと教育の密接な関係が存在し、そこではエロスこそ「国家における教育の制度」¹⁸なのである。

ヴィネケンによれば、教育には「個人的教育、社会的教育、天才的教育、天才的教育」という三つの段階があるという。もつとも下位にあるのが、直接的な命令や禁止による「個人的教育」で、普通は教育と言えばこのことが考えられているが、ヴィネケンはこれを有害無益だと見なす。次に来るのが、慣習などによる「社会的教育」で、これは

社会に適應可能な人間を創るという「社会化」の点で一定の效果を持つ。

しかし、第三のそして最高の段階は、魔術的なものであり、本来に人間本質の核心に働きかけ、本来の再生、人間の靈的な新しい創造を呼び起こす教育である。その媒体はエロスである。⁽⁴⁾

このような、「エロス」が媒体となり「本来に人間本質の核心に働きかけ、本来の再生、人間の靈的な新しい創造を呼び起こす」過程を、ヴィネケン⁽⁵⁾は、たとえば思春期の「性的発達」に即して次のように説明している。

重要なのは、人間がこの自然の贈り物をどうするかということ、それをいかに人間化し、彼の精神的宇宙の中に組み入れるかということである。自然の発達によって与えられた興奮を精神的な諸価値に、何らかのより美しく、より豊穡な人間性に変化させるのが、人間の課題である。動物的な充足という短絡によって興奮を静めるべきではなく、その興奮は仕事を成し遂げ、諸価値を創造し、生を高めるべきである。しかし、目覚めた性的衝動を最初に人間化し順応させるのは、その新しい諸力をエロスへと移行させることである。⁽⁶⁾

すなわち、「目覚めた性的衝動」を「エロスへと移行させること」によって「人間化」することが教育なのであり、そこにおいてエロスは「諸価値を創造し、生を高める」力を持つ。それはまたヴィネケンも言うように、すでにプラトンの『饗宴』においてディオティーマが「教育的エロス」について述べていることもある。

身体は、自分が身ごもっているもので、醜いのより、むしろ美しいのを歓迎しますが、その上魂の美しくて高く素質のいいのに出会えば、その両方を合せもっているものを大いに歓迎します。そうしてこの人間に對しては徳に関する議論や、善い人はどのようなものでなければならぬか、また何をなさなければならぬかということに関する言論をすぐさま豊富に手に入れて、この人を教育することを企てます。⁹¹

それにしてもなぜまたこのエロスは異性の間や、同年齢の間では不可能であり、少年と成年男性という「まったく特定の典型的關係」をとらなければならないのであろうか。たとえば、同時代のシュプランガーの『エロス』も、上述したようなプラトンのエロスを理想としている点でヴィネケンのエロスと共鳴するものがあるが、⁹²両者が決定的に違ふのは、前者がもっぱら異性愛を念頭に置いているのに対して、後者はもっぱら同性愛を念頭に置いている点である。

それに対してヴィネケンは、次のように答えている。

男と女は反対であり、一方が他方を完全に理解することはない。しかし、男は少年と同じ心性の中に生きている。彼は女がまったく理解しないことを賢く氣高い少年に言うことができる。⁹³

この点に関してヴィネケンは、さらに次のようなエロスと性衝動の區別も持ち出す。つまり、なるほど彼は、エ

ロスにおける性衝動に直結する官能的な要素を必ずしも否定はしない。

性的なものの何らかの自動的共鳴のないエロスは不可能であり、性的なものは、むしろエロスの前提であり、その身体的可能性、源泉であらう。⁽⁵¹⁾

しかし、一方で彼は、「直接的に愛として体験されるものは、さしあたっては性衝動とは何の関係もない」し、「エロスなしの性的なものは疑いもなく存在する」と述べ、あくまでエロスと性的なものを同一視することには反対する。そして、性的なものは、なるほどエロスの「源泉」ではあるが、また「動物的な充足という短絡」へとつながりがちであるが故に、性的なものをより多く持つ異性愛は、「より不毛で、より不純な情熱」であり、「教育」には不向きだ考える。

まさにこのエロスは、女性に対する愛よりも、性衝動による眩惑と誘惑にさらされることがより少ない故に、またその自律性故に、それに捉えられた人たちにとって、とりわけ純粹で神聖なものと感じられる。⁽⁵²⁾

さらに、単なる同性ではなく、一方が少年であり他方が成年である必要については、まさにこのエロスが教育の「媒体」であることから説明される。すなわち、一方が「指針、指導者、模範」⁽⁵³⁾であってこそ教育が可能であり、双方とも未熟な少年ではそれは不可能である。このエロスにおいては、「讃嘆する男性によって愛されたい、彼に従い、彼に属し、彼の人生に関与することを許されたいという憧憬」に端を発する、「彼と同じようになりた

いという模倣」こそ、その教育の核心だからである。

またヴィネケンは、教育という「媒体」を生徒を「素材」とする一方的なものと考えがちな当時から今日に至る教育観にも批判的で、その是正もこの「パイデラスティア」に期待する。

いわゆる人生の現実や利害にまだ囚われてなく、「中略」新しい生を、論理的並びに道徳的な首尾一貫性に対する不安なく、自らの生の最も奥深い欲求からとにかく歓迎し、肯定し、握み取ることが、そしてとにかく愛し信じていることがまだできる若者の間においてのみ、精神的人間は本当に彼自身であり、自由でありえるだろう。⁽⁹⁰⁾

つまり、このエロスによる教育は双方向性であって、「模範」を得る若者だけではなく一方の大人もまた大きな恩恵をこうむる、すなわち、真の理解者と活動の対象を得る、というのである。

このように見てくると、ヴィネケンの言う「パイデラスティア」というエロスの形が、一方においてなるほどきわめて一面的であるのは確かであるが、他方それは、「退廃や不具」⁽⁹¹⁾という激しい非難と差別に晒されてきた同性愛に対するまったく別の見方と評価を提示する画期的なものであることが分かる。すなわち、「パイデラスティア」は、成熟した「模範」的な青年男性と「賢く気高い少年」という「まったく特定の典型的関係」を前提とし、何よりも教育という目的を至上の価値とした一面的なものであり、また女性の教育を無視してもいるが、しかし、他方それは、タブーとされてきた同性愛を、単に消極的に容認するのみならず、「限らない献身と高い道徳性の基

礎⁶²」として積極的に賞賛し、教育の根幹に位置づける、きわめて大胆なものでもある。前章において、市民社会

を脱し切れないヴィネケンの反動性について言及したが、彼の教育の核心をなすエロスの問題において、彼はまさにその市民社会に敵対し、それを糾弾していたのである。

このことは、「パイデラスティア」による教育の実践によつて、ヴィネケン自身が市民社会から被つた迫害の激しさと執拗さからも例証される。第一章で、学校批判のために「自由学校共同体」を追放されたことを述べたが、迫害はそれだけではなかつたのである。すなわち、第一次大戦後のヴィルヘルム帝国崩壊によつて一九一九年にヴィツカースドルフ復帰を果たしたヴィネケンは、その後わずか一年半後にまたそこを追われ、さまざまな悶着のあつた後、一九二六年には決定的にヴィツカースドルフから手を引かざるをえなくなる。それはヴィツカースドルフにおける彼の生徒との「性的関係」が発端となつていたが、その過程で生じたさまざまなスキャンダルや裁判の末、結局ヴィネケンは教育者としての生命まで実質的に失うことになる。実は、この問題に対する彼のいわば弁明の書として書かれたのが『エロス』であり、この章のほとんどの引用は、この『エロス』によつてゐる。裁判になつた事件の外面的な経過は次のようなものである。あるふたりの生徒がヴィネケンの部屋で裸のまま彼から抱擁されたのを、おそらく無邪気な自慢のつもりからであらう、友人たちに話していた。しかし、それを聞きつけたヴィネケンに敵対するヴィツカースドルフの同僚（手伝いの大学生）がそれを取り上げて問題にし、結果的には裁判にまで発展する。裁判における彼の罪状は以下の通りである。

性的関係における一般の羞恥感情と道徳感情を傷つけ、主観的には性的な快感の興奮を目的とした、生徒と

の身体活動。⁽⁶³⁾

今日でも新聞の三面記事で見られるようなこれらの罪状の卑俗さは、上述したようなヴィネケンの高邁なエロス論と、戯画的ともいえる好対照をなしているが、これら罪状に対してヴィネケンは、個々にかつ具体的に反論している。たとえば、「性的関係における一般の羞恥感情と道徳感情」が何ら絶対的・客観的なものではなく、時代や当事者によって変化するきわめて相対的なものであること。裸体がヴィッカースドルフではそれほど特異なことではなく、いくつかの行事や活動において生徒全員が裸体であること。また生徒に対する強制や権力の行使がいつさいなかったことを、当の生徒たち自身も証言していること、などである。

さらにヴィネケンの反論は、そもそもこの裁判の基にある、「死んだ概念」ばかりで「生きた現実」を知らない⁽⁶⁴⁾市民社会の司法一般に対しても向けられる。

司法は、根底において倫理的な価値判断を、いやその上、精神的な「事実構成要因」の承認、すなわち心理的考察をあつさり拒否し、機械的・物理的「事実構成要因」に没頭している。⁽⁶⁵⁾

すなわち、検事は裸体や抱擁という「機械的・物理的『事実構成要因』」に没頭するばかりで、果たして当事者の動機や気持ちがいかなるものであったのかという、「精神的な『事実構成要因』」にはほとんど関与しない。「性的な快感の興奮」という下衆な思い込みに固執し、いかに崇高な感情が存在し得たかということを、想像するこ

とさえできないのである。ヴィネケンのエロス論のような、「特別で独特なものに対して公正であることが、今日行われている司法には不可能」⁽⁶⁶⁾なのであり、「理解できないことを通用させる謙虚さと精神的畏敬が市民階級には欠如している」⁽⁶⁷⁾と彼は批判する。

とはいえ、これらの個々の具体的な反論は、ヴィネケン自身が生徒と教師の「性的関係」を、この場合はともかく、一般論としては否定していないどこるかむしろ賞賛しているために、いささか説得力を欠いていることは否めない。そういう意味で、先の罪状は、それなりに公正なものである、問題は、教育とエロスの関係に対する、ヴィネケンの見解と市民社会のそれが根本的に異なる点にこそある、と言わねばならない。教育におけるエロスを賞賛するヴィネケンと、それをタブーとする近代市民社会には、そもそも決定的な対立がある。ヴィネケン自身もこのことはよく分かつていたのであり、それだからこそまた『エロス』において彼は、個々の具体的な反論はそこそこに、この章で詳述したようなエロスと教育の密接な関係について自説を展開するとともに、市民社会を成り立たせている大きな支柱である近代の医学に対する、次のような厳しい分析と容赦ない批判を行っているのである。

すなわち、「健康」と「病氣」をめぐって医学は、自然科学的で客観的な真理を標榜しているが、ヴィネケンによれば、実はそれはきわめて恣意的な「価値」であって、「証明不可能な信仰箇条であり」、自然科学の預かり知らぬことである。

そうなればもちろんもはや科学ではなく、むしろ科学の反対であるような、科学の応用というものの、特定の

目的のための科学の利用というものがある。それは技術である。そしてその技術の枝葉のひとつが医学、すなわち、個人の生命の維持という目的のための自然科学の応用となる。そして医学は人間に《健康》という価値基準を与えた。価値があるのは、《健康な》ものである。⁽⁶⁸⁾

近代医学は、自然科学的真理の隠れ蓑のもとに、その実「臆病者の理想」⁽⁶⁹⁾である「健康」という恣意的な価値基準にしたがつて、多くのものを《病気》であり《異常》として排除してきたが、そのひとつが「バイデラスティア」に他ならない。ここには、あの青年運動の論客ブリュアーも暗示していた、「正常」と「異常」をめぐる近代医学の功罪が、その後のフーコーを彷彿させるような、より明確な形で告発されている。⁽⁷⁰⁾彼の裁判を総括してヴィネケンは、そこには「我々が今日いる精神史上の危機がはっきりと現れている」と述べているが、そのエロスを論を通して彼は、近代市民社会の持つ傲慢さを鋭くえぐり出したのであった。

註

- (1) Freideutsche Jugend. *Festschrift zur Jahrhundertfeier auf dem Hohen Meißner*. In: *Dokumentation der Jugendbewegung*. Bd. 1, Hrsg. v. Werner Kindt. Eugen Diederichs Verlag, 1963, S. 98-104.
- (2) グスタフ・ヴィネケン『青年のための戦い』(『青年期の教育』明治図書、一九八六年、訳・鈴木聡) 一二五頁。
- (3) 同書一二三頁。

- (4) Gustav Wyneken: *Was ist Jugendkultur?* München 1913, In: *Dokumentation der Jugendbewegung*, a.a.O., S.120.
- (5) ゲヘーブ（一八七〇—一九六一）はまもなくヴィッカースドルフを去り、独自にオデオンヴァルトに寄宿制学校を創建するが、ここには、あのトーマス・マンの息子クラウス・マンが一時身を寄せている。クラウス・マンは結局オデオンヴァルトを中途退学するが、ゲヘーブへの私淑は変わる事がなかった。Vgl. Klaus Mann: *Wendepunkt*, edition spangenburg 1976.
- (6) Gustav Wyneken: *Was ist Jugendkultur?* a.a.O., S.120.
- (7) *ibid.*, S.119.
- (8) *ibid.*, S.118.
- (9) *ibid.*, S.119.
- (10) *ibid.*, S.120.
- (11) *ibid.*, S.121.
- (12) Gustav Wyneken: *Schule und Jugendkultur*. Eugen Diederichs Verlag, Jena 1919, S. 49f.
- (13) Gustav Wyneken: *Was ist Jugendkultur?* a.a.O., S.118.
- (14) *Ibid.*, S.116f.
- (15) Gustav Wyneken: *Eros*. Adolf Saal Verlag, 1922, S.27f.
- (16) 今井康雄『ビュルター・ペンヤミンの教育思想』（一九九八年、世織書房）おもに三八、四一頁。
- (17) Alfred Kurella: *Der Einfluß Gustav Wynekens auf meinen Werdegang*. In: *Erinnerungen an Gustav Wyneken*. Hrsg. v. Paul Nagel, Göttingen 1966, S.34.

- (18) Gustav Wyneken: *Der Krieg und die Jugend*. München 1915, S.12.
- (19) 『ヴァルター・ベンヤミン著作集』一四（書簡Ⅰ、訳・野村修、一九七五年、晶文社）、六七、六八頁。
- (20) しかし、その後もヴィネケンを慕い続けた人々もいた。たとえば、第一章の最後で言及したクレラは、政治局文化委員長として新生まもない東ドイツの文化政策を主導していた後年でもなお、「我々の道は分かれた」と認めつつ、しかしその徹底的な「論争性」や「闘士」への教育において、今でもヴィネケンを高く評価すると、亡き師を偶々会で熱弁をふるっている。Vgl. Alfred Kurella, a.a.O., S.35f.u.38a.
- (21) たとえば、野村修（『ベンヤミンの生涯』平凡社 一九九三年、四四頁）も、「祖国」といった概念はヴィネケンにとっても必ずしも疎遠なものではなく、戦争肯定は、「かれ自身とすればまったくの転向というわけではない」と述べている。
- (22) Gustav Wyneken: *Was ist Jugendkultur?* a.a.O., S.127.
- (23) *ibid.*, S.122.
- (24) *ibid.*, S.127.
- (25) Gustav Wyneken: *Der weltgeschichtlichen Sinn der Jugendkultur*. 1916, In: Dokumentation der Jugendbewegung. a.a.O., S.152.
- (26) グスタフ・ヴィネケン『青年のための戦い』上掲書二二九頁。
- (27) Gustav Wyneken: *Der weltgeschichtlichen Sinn der Jugendkultur*. a.a.O., S.152.
- (28) *ibid.*, S.152.
- (29) Gustav Wyneken: *Was ist Jugendkultur?* a.a.O., S.124.
- (30) Gustav Wyneken: *Der weltgeschichtlichen Sinn der Jugendkultur*. a.a.O., S.155.

- (31) Gustav Wyneken: *Was ist Jugendkultur?* a.a.O., S.124.
- (32) Gustav Wyneken: *Der weltgeschichtlichen Sinn der Jugendkultur.* a.a.O., S.155.
- (33) スタッフ・ヴィネケン『青年のための戦い』上掲書一三六頁。
- (34) 同書一三七頁。
- (35) 同書一三五頁。
- (36) たとえば、ウォルター・ラカー『ドイツ青年運動』（訳・西村稔、人文書院、一九八五年）や田村栄子『ドイツ青年運動』（名古屋大学出版局、一九九五年）参照。
- (37) Gustav Wyneken: *Der weltgeschichtlichen Sinn der Jugendkultur.* a.a.O., S.160.
- (38) Gustav Wyneken: *Was ist Jugendkultur?* a.a.O., S.127.
- (39) この点に言及しているヴィネケン文献はほとんどないが、たとえば若き信奉者のひとりエーバーマイアーは、「長くは続かなかったナチズムとの精神的共感」に言及している。Vgl. Erich Ebermayer: *Gustav Wyneken*. Dippel Verlag, Frankfurt am Main 1969, S.77.
- (40) 今井康雄『スタッフ・ヴィネケンにおける社会批判的教育思想の両義性』（『教育学研究』第四七巻第三号、一九八〇年）三一頁。
- (41) 鈴木聡『青年の学校の再生を求めて』（上掲書『青年のための戦い』一二二及び一二五頁。
- (42) Walther Killy (Hrsg.): *Literatur Lexikon*. Bertelsman, 1988.
- (43) 筆者が見つけた唯一の例外は、Thijs Maassen: *Pädagogischer Eros*. Verlag rosa Winkel, 1995. だけでも。
- (44) Gustav Wyneken: *Eros*. a.a.O., S.27.
- (45) Walter Benjamin: *Erotische Erziehung*. In: *Gesammelte Schriften*. Bd. II.1, S.71f.

- (46) Gustav Wyneken: *Eros*. a.a.O., S.3
- (47) *ibid.*, S.47.
- (48) *ibid.*, S.9.
- (49) *ibid.*, S.47.
- (50) *ibid.*, S.52.
- (51) *ibid.*, S.47f.
- (52) エドアルト・シュプランガー『エロス』（訳・村井実／長井和雄、『文化と教育』玉川大学出版部、一九六九年）三〇五―三二五頁。原著第四版は一九二八年。

- (53) *ibid.*, S.46.
- (54) *ibid.*, S.24.
- (55) *ibid.*, S.4.
- (56) *ibid.*, S.24.
- (57) *ibid.*, S.48.
- (58) *ibid.*, S.46.
- (59) *ibid.*, S.51.
- (60) *ibid.*, S.50.
- (61) *ibid.*, S.18.
- (62) *ibid.*, S.16.
- (63) *ibid.*, S.36.

- (64) *ibid.*, S.41f.
- (65) *ibid.*, S.35.
- (66) *ibid.*, S.40.
- (67) *ibid.*, S.3.
- (68) *ibid.*, S.5.
- (69) *ibid.*, S.6.
- (70) 拙稿『ドイツ青年運動におけるエロスとナシヨナリズム——ハンス・ブリューアーをめぐって』（京都大学総合人間学部ドイツ語部会『ドイツ文学研究』報告第四四号、一九九九年）参照。
- (71) *ibid.*, S.40.